

## 『本朝遯史』と『扶桑隱逸伝』にみる隱遁像

島内裕子<sup>\*1)</sup>

## はじめに

本稿では、江戸時代にまとめられた二種類の隱遁伝を概観することによって、「隱遁」がどのようなものとして捉えられていたかを考えてみたい。

徒然草第一八段は、中国の二人の賢者・許由と孫農の故事を取り上げて、簡素な暮らしを称揚する段である。「人は、おのれをつづまやかにし、奢りを退けて財を持たず、世を貪らざらんぞいみじかるべき。昔より、賢き人の富めるはまれなり」と書き出されている。そして、許由は何も家財道具を持たず、水を飲む時でさえ手で掬って飲んだこと、孫農はふとんを持たず藁一束を敷いて寝ていた、という話を紹介した後に、「唐土

の人は、これをいみじと思へばこそ、記しとどめて世にも伝へけめ、これらの人は、語りも伝ふべからず」と書いている。中国ではこのような質素で自由な生き方を、人々がすばらしいと思ったからこそ、故事として伝わっているのに、この日本では伝わっていないのは、日本人はこのような生き方を称賛してこなかったからなのだろう、実に情けないことだ、というのが兼好の感想である。

しかしながら、兼好の批判は必ずしも当たっていない。なぜなら、平安時代以来、高僧伝や往生伝のような仏教書、あるいは平安末期から鎌倉時代に盛んに書かれた仏教説話集では、名利に捉われない生き方が、数多く書かれているからである。そのような書物は当然兼好も読んでいたはずなのに、なぜこのような不満を述べているのであろうか。それはおそらく、兼好の

念頭にあったのは、仏教説話集に出てくるような出家者とは少し違った概念としての隠遁者だったからではないだろうか。許由も孫農も出家者ではなく、イメージとしては賢者である。だから兼好が求めたのは、宗教上の理由から無一物で生活している人ではなく、賢者や自由人としての捉われない生き方をした人々の故事をまとめた本がないのが不満だったのではないだろうか。

兼好の「これらの人は語りも伝ふべからず」という批判に直接応えたのは、江戸時代になってまとめられた二種類の隠遁者列伝、『本朝遯史』と『扶桑隱逸伝』であった。<sup>11)</sup> しかもこれら伝記の中には、兼好のことも、さらには徒然草を直接の典故とする何人かの人物も取り入れられている。<sup>12)</sup>

子 裕 内 島

# 一 『本朝遯史』と『扶桑隱逸伝』

『本朝遯史』は寛文四年四月に刊行された隠遁者の伝記で、二巻二冊からなる。著者は林読耕斎、すなわち林羅山の四男靖である。彼は若い頃から病弱で、三八歳で没した儒学者である。『本朝遯史』には、上巻に民黑人から橘正通まで二二人、下巻には源顕基から善住まで二九人、合計五一人の隠遁者の小伝が漢文でまとめられている。これらの隠者は、古代から室町時代にわたり、現代でもよく知られている猿丸や蟬丸、西行・長明・

兼好などの歌人・文学者もいるが、多くは今ではほとんど無名の人々である。一方、『扶桑隱逸伝』は『本朝遯史』に遅れることわずか半年余り、寛文四年一月に僧侶の元政によってまとめられたもので、三巻三冊からなる隠遁者の列伝である。上巻は役小角から木幡山盲僧まで二四人、中巻は嵯峨隱君子から平康頼まで二八人、下巻は西行から妙旨まで二三人、合計七五人の略伝が書かれている。

『本朝遯史』も『扶桑隱逸伝』も、ともに引用書目を掲げているが、歴史書・歌集・漢詩集・系図・説話集などを伝記資料として使い、隠遁者たちの伝記を要領よくまとめている。長く詳しく書かれている人物もあるが、多くはそれぞれ賛も含めてほぼ一〇行から二〇行程度、字数にして二〇〇字から四〇〇字程度である。この二書はよく似た書物で、『本朝遯史』と『扶桑隱逸伝』で重複する人物は二八人にのぼっている。ただし、『本朝遯史』には武家出身の隠遁者もかなり入っているのに対して、『扶桑隱逸伝』では僧侶のことが多い。したがって、概括的に言えば、『扶桑隱逸伝』は高僧伝や仏教説話集のような色彩がかなりある。

両書の性格はそれぞれの序文によくあらわれている。『本朝遯史』には、まず野間静軒の序文が付いている。それによれば、静軒自身、古今の逸士の奇節卓行を聞くごとに仰慕の心押さえたが、二〇年前に『古今逸士伝』をまとめたが、それはみな

中国の隱士であって、日本の隱士は世の中に彼らの伝記が伝わっていないのが遺憾であった。ここに林読耕斎が、五一人の隱者伝をまとめたことを喜び、末長く本書が湮没しないことを望むと述べている。静軒が、中国の隱遁伝は資料が残っているのも、まとめやすかったが、日本のものはそれがないので自分はまとめられなかった、と書いているのは、徒然草第一八段で兼好が述べていたことと同様で興味深い。

この静軒の序文に続いて、読耕斎の自序がある。「士は山林を忘れず。故に仕へず、故に帰田す。故に官を辞し、故に骸を乞ふ」と冒頭にあるように、彼は仕官しない自由な境涯に強く憧れている。「嗚呼、余が素意山林に在り」とも書いている。読耕斎は、僧侶がそのまま隱遁者であるわけではなく、泉石を遊び、煙霞に耽る者を隱遁者と考えている。そして、民黑人から近世にいたるまで「僅かに五十一人を得たり」と述べている。五一人という人数を「僅か」としているのは、自分の編述に対する謙辞も含まれているようだが、それ以上に、隱遁者を慕い求める読耕斎の気持ちが表れていると思われる。

『扶桑隱逸伝』の自序では、隱者に大隱と小隱があり、大隱よりもさらに「大なる者」は仏であるとしている。このことから、明らかに、『扶桑隱逸伝』は仏教の見地からの編述であり、「蓋し大法東漸の土、高き者は多く僧となる。是の故に素服尤も少しなり」とも述べている。

なお、『本朝遯史』には挿絵はないが、『扶桑隱逸伝』には挿絵がついている。この挿絵はそれぞれの隱者の特徴づける場面が巧みに組み合わされている。たとえば、鴨長明の挿絵は『方丈記』の住まいの描写そのままに、小さな庵には琵琶や琴が立てかけてあり、棚には書物が積み上げられている。長明は墨染の衣を着て、庵の縁側に座っている姿で描かれている。

ところで、『扶桑隱逸伝』の引用書目に、わずか半年前に刊行されたばかりの『本朝遯史』が入っているのはやや不審であるが、この点について宗政五十緒氏は、次のように述べている。

『遯史』刊行後、元政が同書を看読し、これに触発されて『隱逸伝』を撰述し、刊行せしめたと考えるには、その期間が、不可能とはいえないものの、私にはいささか短かすぎるくらいがあるように感ぜられるのである。むしろ、元政は『遯史』の写本を看読する機会をもった、と考えるべきであろう。元政は当時の蔵書家であり、編述の上梓されるものの多かった人である。書肆にとって好ましき人であり、とりわけ、平楽寺村上勘兵衛は元政を訪問すること屢々であったと思われる。元政は村上勘兵衛あたりを仲介として『本朝遯史』の写本を看読する機会をもったものとして私は一応推測する。<sup>13)</sup>

このように、『本朝遼史』と『扶桑隱逸伝』の二書は関連が深く、類書的な側面もあるのだが、人物の取り上げ方やそれぞれの編者による人物評には相違点もかなりある。ただしこれらの相違点は、先にも述べたように、編者の個性や経歴の違いによって当然生じるべくして生じるものであろうから、ここでは『本朝遼史』と『扶桑隱逸伝』との隠遁観を比較検討することよりも、むしろこの同時期に刊行された隠遁伝に、隠遁者たちの姿がどのように描かれ、どのように批評されているかを考察してみたい。つまり、一人一人の人物が、どのような点をもって隠遁者と認定され、その生き方が評価されているのか、というものを具体的に見てみたい。本稿では、その中から僧侶以外の人物を取り上げることとする。というのは、これらに登場する僧侶たちの個性やエピソードは、一見多様であるように見えるが、生き方としてはパターン化しており、僧侶以外の隠遁者たちの中にこそ、より一層普遍化した隠遁の姿がよく表れていると思われるからである。

## 二 『本朝遼史』と『扶桑隱逸伝』に描かれた兼好

まず最初に、『本朝遼史』と『扶桑隱逸伝』の両方に登場する兼好について考えてみよう。『本朝遼史』では兼好について、次のような略伝が書かれている。原文は漢文であるが、ここで

は漢字平仮名まじりで読み下しにしたものを掲げる。なお、読耕斎は「吉田兼好」と書いているが、この呼称は、最初の注釈書である『徒然草寿命院抄』ですでに吉田兼好と書かれ、江戸時代を通じて一般に踏襲されてしまっている。

### 吉田兼好

兼好は兼頭が子なり。後宇多院北面の臣なり。左兵衛佐に任ず。帝崩じて後、塵を出て嘉遯す。文才あり。和歌をよくす。当時、頓阿・浄弁・慶運とその名、相ひ比し、世にこれを和歌四天王と称すなり。往々に武威守高師直が家に遊び、また他国を歴遊す。木曾路を過ぎて詠歌あり。かつ暇日和語の草子を作す。徒然草と号す。その世俗を憤り、生死を觀じ、時序を感じ、風景を模し、人情を説き、私見を抒ぶ。まことにこれと和文の尤なるものなり。

兼好の伝記と徒然草の内容が、簡潔によくまとまって書かれている。この略伝のもとになっているのは主として、『正徹物語』と『太平記』と『吉野拾遺』である。『吉野拾遺』は成立も作者も不明の説話集である。話のほとんどが南北朝時代の南朝方の人々のことであるが、この中に兼好が登場し、木曾を旅してしばらくそこに庵を結んだこと、諸国を漂泊したことなどが書かれている。

読耕齋は兼好の隠遁を、「嘉遯」と捉えている。嘉遯とは、物事の筋道を立てて、正しい心を持ちこたえるために世を遁れる、という意味である。つまり、彼は兼好の出家の理由を、ただ単に世の中がいやになったからとか、他の近世兼好伝でよく言われるような失恋説などを採らず、志貫徹するためと考えたのであった。この略伝に続けて賛として、読耕齋の批評が付けられているが、そこでは『太平記』の艶書代筆事件を取り上げて、これは兼好にとって、「まことに一生の過錯なり。慨惜すべし」と強く嘆いている。

『扶桑隱逸伝』では、『本朝遷史』に比べて詳しく書かれている。挿絵は、徒然草第一三段をもとにして描かれたと思われる。「ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなうなぐさむわざなる。」というこの段の書き出し部分は、兼好の肖像画の基本形となっている。灯火の傍らで小机に本を広げて、墨染の衣姿の兼好が机に肘をついて座って読書している姿の絵は何枚も描かれている。人々にとって兼好のイメージとして最も親しみ深いのは、このような読書人としての姿であった。兼好の肖像が住まいの様子とともに描かれる場合、簡素な小さな庵の中での読書姿が多いのだが、『扶桑隱逸伝』では、庵というよりもう少し立派な住まいであり、門塀をめぐらし、枝振りのよい大きな松の木まで描かれている。

文体は『本朝遷史』と同様漢文であるが、伝記の記述がより

詳しくなっており、先ほど挿絵の所で触れた第一三段をほぼそのまま漢文体にして引用したり、頓阿や道我との交友についても書いている。その他に元政は、二つのエピソードを取り上げている。そしてこれらのエピソードは略伝の後に書かれている賛と読み合せてみると、ある意図のもとに対比的に取り上げられたものであることが判明する。

一つは、『本朝遷史』でも書かれていたものであるが、高師直の艶書代筆事件であり、もう一つは徒然草第二三八段の千本釈迦堂での出来事である。艶書のことについては、次のように書かれている。原文の漢文体を読み下して、漢字平仮名まじりで示そう。

またつねに高師直が家に遊ぶ。みな和歌をもつて交はる。一日師直兼好に託して艶簡を作らしむ。兼好すなはち書す。その拘はらざることかくのごとし。

読耕齋は兼好が代筆を引き受けたことを、「一生の過錯」とまで痛恨していた。ところが元政の場合は、「その拘はらざることかくのごとし」と書いていることからわかるように、兼好が師直のために艶文を代筆したことを、兼好の物事に拘泥しない態度として、むしろ評価しているかのような口吻である。

千本釈迦堂での出来事も、徒然草の記述を巧みに簡潔な漢文

体書き直している。

たまたま二月の望、夜来、月に乗じて千本の釈迦堂に詣づ。ひそかに堂の後に入りて独り遺教經を聴く。美婦人あり。忽然として来りて、兼好が側らに傍ふ。膏粉移るがごとく、蘭麝人を襲ふ。兼好すなはち席を避く。婦人慕ひ来る。兼好すなはち席を起て去る。けだし宮女の兼好を知る者の、その節操を見んと欲して、相ひ謀りてこれをなせり。

子 千本釈迦堂とは、京都にある大報恩寺のことで、毎年二月九日から二月一五日まで、涅槃講が遺教經会として行なわれていた。釈迦堂は一二三五年に建てられたものが現在までそのまま残っているので、この堂内での兼好をめぐるちょっとした事件を偲ぶことができる。しかし、この段のように兼好の体験が書かれている段は、徒然草の中では珍しい。

徒然草には多彩な話題が書かれているにもかかわらず、兼好自身の体験や彼の経歴のことはあまり書かれていない。それが徒然草の大きな特徴の一つと言ってもよいだろう。このことは、徒然草とはそもそもどのような範疇の作品であるのかを考える際に、たいへん重要な意味を持っている。よく日本文学の「三大随筆」などといって、『枕草子』や『方丈記』と徒然草をひとまとめにすることがあるが、これら三作品の共通点は、せい

ぜい散文で書かれた物語以外のものというくらいで、まったく違う種類の作品である。『枕草子』と『方丈記』は、清少納言と鴨長明が、それぞれの日常や体験を書くことがメイン・テーマになっていると言っても過言ではないと思う。しかし、徒然草の場合はこれらとまったく異なり、むしろ兼好は自分のこと以外を書くことに執筆の意義を認めているかのようなのである。兼好にとって書くに値することは、自分のことではない。

徒然草には、彼が興味を持った事柄が書かれているのであって、兼好の姿は表現の背後に隠れている。「隠者」とは世を遁れて生きる人のことであるが、生活様式のことではなく、精神のあり方を問題にするとしたら、まさに自分のことを表に出さず、「隠す者」が隠者ではないだろうか。王朝女流日記の時代から近代の私小説にいたるまで、日本文学の大きな流れとして、「自分を語る、あるいは自分に託して語る」という根強い文学伝統があった。しかしながら、自分の体験を赤裸々に語るという一見素朴な方法によって、真実を語ることは可能であろうか。自分のことを語れば語るほど、自己神話化してしまわないのか。徒然草を読んでいて感じる一種の爽快さは、文体の簡潔さや描写の的確さだけから来るのではない。兼好の自己に対する寡黙さが、徒然草という作品を他の多くの日本文学と異質のものとしているのである。その兼好が徒然草も終わり近くなった第二三八段になってようやく自分のことを語り始める。自讃の事

七カ条がそれである。しかしこれもいかにも兼好らしい書き方と思わずにはいられない。なぜなら自分のことを書く場合、他の文学者だったら、どうしても忘れることができない辛い体験や悲しい失恋のことを書くことが多いのに対して、兼好は自分が他人から誉められた話ばかりを書いているのである。

徒然草第二三八段は、兼好が自分の自慢話を七つ書いている段である。兼好は近友という人が書いた馬芸についての自讃七カ条を読んで、その先例にならって、自讃を七つ書いた。ある時花見に出掛けて、馬を走らせている男を見て、もう一度走らせたら必ず落馬すると兼好が予見したところ、それが当たったこと。『論語』のある語句がどの巻にあるかを記憶していたこと。漢詩の韻に通じていたこと。それまで不明だった額の字の揮毫者を特定できたこと。「八災」という人の心を乱す八つの煩いを思い出せなかった僧に、兼好が教えてあげたこと。大勢の僧侶たちの中から探すべき人をすぐに兼好が見付けたこと。これらは、兼好の記憶力や博学や観察力がすぐれていたことをよく示しているが、どれも他人に感心され称賛された話として書いている。「人みな感ず」「人みな興に入る」「いみじく感じはべりき」などという表現が見られるからである。

それに対して最後の自讃だけは人々の称賛の声は直接は書かれていない点で、他の六つの自讃とややおもむきが異なる。徒然草の中でもこれほど兼好が自分の振舞いについて詳しく書い

ているのは稀であるので、原文を引用してみたい。先ほどの『扶桑隱逸伝』の漢文体と比べて徒然草の原文で読んでみると、後日談を含めてもう少し状況がよくわかる。

二月十五日、月明き夜、うち更けて千本の寺に詣でて、後より入りてひとり顔深く隠して聴聞しはべりしに、優なる女の、姿・匂ひ、人よりことなるが分け入りて、膝に居かかれ、匂ひなども移るばかりなれば、便あしと思ひてすり退きたるに、なほ居寄りて同じ様なれば、立ちぬ。

その後、ある御所様の古き女房の、そぞろこと言はれしついでに、「無下に色なき人におはしけりと、見おとし奉る事なんありし。情けなしと恨み奉る人なんある」とのたまひ出したるに、「さらにこそ心得はべらね」と申して止みぬ。

この事後に聞きはべりしは、かの聴聞の夜、御局の内より人の御覧じ知りて、候ふ女房を作り立てて出だし給ひて、「便よくはことばなどかけんものぞ。その有様参りて申せ。興あらん」とて謀り給ひけるとぞ。<sup>4)</sup>

この話は三つの場面から成り立っているで、それぞれの場面が明確になるように三段落に分けてみた。最初はある年の二月一五日に千本釈迦堂に、兼好が聴聞に出掛け、だれにも気づ

かれないように顔を隠して一人後の方に座っていると、美しい女性が人込みを分けるように入ってきて兼好の隣に座って、彼の膝に寄り掛かるようにする。その女性の香りが移るようで具合が悪いと思ったので、兼好が少し離れるようにすると女はまた彼に擦り寄って来るので、兼好は立ち上がってその場を去った。

その後、ある御所に古くから仕えている女房が、いろいろな雑談のついでに、「あなたは本当に情趣がわからない人でいらっしゃる。お見下げしますよ。つれないお人と恨んでいる女性がおりますよ」と言うので、「さあ何のことでしょう、おっしゃる意味が腑に落ちません」とだけ兼好は答えていた。

さらにその後聞いたところでは、あの聴聞の夜、兼好が来ているのを見つけた貴人が、傍にいた女房を美しく装わせて、「もう少しまくいっただけなら兼好に何か話し掛けて見なさい。そして彼の反応を教えなさい。どんな態度を兼好が取るか面白い」と言って謀り事をしたのが判明した。

この話はよく読んでみると、いろいろわからない点がある。そもそもこの出来事はいつのことか。つまり、兼好がまだ宮中に仕えていた若い頃なのか、それとも、出家した後のことなのか。また、なぜ兼好は顔まで隠して他人に知られないようにして聴聞していたのか。さらに、このような謀り事をした貴人は、男性か女性か。美しい女性に対する兼好の態度がなぜ興味を惹

いたのか。そしてなぜこの話が自讃の最後に書かれ、どこが兼好にとって自慢の種だったのか。

『扶桑隱逸伝』では、この話を『太平記』の代筆と対比して、独自の解釈を示した。賛を読み下し文で引用してみよう。

賛に曰く、兼好、師直をもつて友となし、かつその艶書を筆す。物我相ひ忘るるがごとくしかり。淫女の魅惑に遇ふに及んで、すなはち秋霜烈日、凜然として侵すべからず。謂ひつべし、和にして介なる者なりと。ある人の曰く、学びつべしやと。曰く、柳下惠は百世の師なり。しかれどもその跡あるいは学ぶべからず。兼好が介なくして兼好が和を学びば、すなはちその失せざる者はほとんど希ならん。

つまり、『扶桑隱逸伝』の著者である元政は、兼好の人間性を画面から捉えている。兼好は友人である高師直に頼まれたこととして代筆を引き受けたのであって、これは兼好の柔軟な一面の表れである。一方、見知らぬ女性の誘惑に対しては、きっぱりとした態度を取った。これも兼好の清廉潔白な一面である。「和にして介なる者」とはそのような兼好の二面性を捉えているのである。

ところでここで柳下惠という人物のことが出てくる。柳下惠とは、中国の春秋時代の魯国の賢者で、彼のことは『蒙求』に



二ヶ所書かれている。<sup>(5)</sup> ひとつは、柳下惠は曲がったことが嫌いでいつも真っすぐな態度を取っていたので、それを快く思わない人々によって官位を妨げられたりしたが、みずからが信じる道を貫いた、という記事。もうひとつは、暴風雨で家が壊されてしまった隣家の未亡人が、顔叔子の家に避難してきた時に、あらぬ疑いが起きないように朝まで彼女に灯燭を持たせておいた話の中に、柳下惠の故事が紹介されている。それによれば、顔叔子は女性を家に入れたが、魯国のある人などはこれと似た状況でも女性を家に入れず、自分はある柳下惠とは違うのだと言ったという。そして孔子がその魯国の人の態度を誉めたという話である。

男子曰く、柳下惠はもとより可なり。吾はもとより不可なり。吾はた吾が不可をもつて柳下惠の可を学ばんや、と。  
孔子曰く、柳下惠を学ばんと欲する者、いまだこれより似たるものあらず、と。

あの立派な賢者の柳下惠だったら女性への態度を疑う人はいないでしょうが、わたしはそのような立派な人物ではありません。わたしが柳下惠と同じ態度を取っても、誰も信じてくれないでしょう。だからわたしは柳下惠を学ぼうとは思いませんとある人が言った。この話を聞いて孔子は、柳下惠を学ぼうとす

るなら、このような極端ともいえるくらいな態度を取るのがよいのだ、と語ったという。

孔子のことはややわかりにくいですが、おそらく、外見上のことだけ同じようにするのが学ぶということではなく、その心を真に学ぶのが大切で、柳下惠のような境地に達していない人は、その人なりに一番自分が納得できる態度をとるのが望ましい、ということを言っているのであろう。

ここで『扶桑隱逸伝』の兼好に対する論評に戻って考えてみると、『蒙求』を介在させることによって初めて元政のいわんとすることが見えてくる。すなわち、元政は兼好のようなきっぱりとした態度を持ち合わせていない人は、あの魯国の人が柳下惠のまねをしなかったように、兼好をまねてはいけない、と述べているのだ。徒然草第二三八段の注釈などを見ても、管見に入った限り柳下惠のエピソードは触れられていないので、元政の解釈には独自のものがある。あるいは一步推測を進めるならば、元政は千本釈迦堂での兼好態度を、この魯国のある人と重ね合わせて解釈したのかもしれない。兼好が見知らぬ女性の誘惑にまったく乗らずぐにその場を立ち去ったのは、他人に疑われるような態度を見せぬためであり、兼好自身『蒙求』を読んでいたことは徒然草の表現のあちこちからうかがわれるので、兼好の態度は『蒙求』のこの話の影響を受けているかもしれない、とも考えられるからである。

『本朝遯史』と『扶桑隱逸伝』における兼好の評価は、艶書代筆に関しては編者の価値観を反映して対照的なものとなっているが、読耕斎が兼好の出家を嘉遯と呼び、元政が兼好の態度を凡人には真似のできないものであるとした点を考えれば、両書とも隠遁者としての兼好の人間性を掘り下げたものとなっていると言える。ここでは兼好についての記述を取り上げたが、他の場合でも、ある人物の人間性に注目することが多く、その点が、両書をそれ以前の時代の神仙伝や遁世譚とは異なるものとしている。

### 三 隠遁者たちの相貌

#### 1 民黒人

次に、『本朝遯史』と『扶桑隱逸伝』の中から、人間味あふれる隠遁者たちの姿を何人か取り上げて、隠遁のさまざまな生き方をみてみよう。そこには、「隠遁」といっても紋切型でない、いろいろなスタイルが描かれている。ところで、これは『本朝遯史』にも『扶桑隱逸伝』にもどちらにも共通して言えることであるが、なぜ隠遁したのかという理由の詮索よりも、どのようなスタイルで隠遁しているかという隠遁後の生活様式に力点を置いて書いている。現代人の問題意識からは、とかく「なぜ」「どうして」という原因や理由の探索に目が向きがちで

あるが、これらの書物での関心の所在は、違うようである。

『本朝遯史』の冒頭に登場するのは民黒人で、彼は『扶桑隱逸伝』では三番目に位置する。『扶桑隱逸伝』の冒頭は役小角である。彼は神仙的な人物で、岩窟に三〇年暮らし、松の実を食べていたという。二番目は伏見翁で、彼は菅原寺という寺のかたわらにずっと臥していたが、行基がやって来た時起き上がったという。役小角も伏見翁もどちらも宗教的な雰囲気濃厚すぎて、いまひとつ生身の人間味に乏しい。

たのくろひと  
民黒人は奈良時代に成立した漢詩集『懷風藻』の末尾近くに掲載されている漢詩の作者で、『懷風藻』では、「隠士民黒人」となっている。彼は、「幽棲」と「独坐山中」という二編の漢詩を残している。『懷風藻』には一二〇編あまりの漢詩が収められている。一編一編の内容を読んでみると隠遁志向の詩もあるが、題名だけを見渡してみると、このような題は他にはない。

#### 幽棲

試みに囂塵の処を出で、追ひ尋ぬ仙桂の叢。

巖谿俗事なく、山路樵童あり。

泉石行々異にして、風烟処々同じ。

山人の樂しびを知らまく欲りせば、松下に清風あるといふことを。<sup>6)</sup>

大意を訳してみれば、「喧騒の巷を後にして、香り高い木々が生えた山野を求め、さまよう。谷間には世間のわずらわしさもなく、山道には樵の子どもがいるばかり。歩いて行くと、次から次へと眼前に泉や岩石が違った光景として現われるが、あたりを吹き渡る風、立ちのぼる煙や靄は、山中どこでも変わらず、好ましい限りだ。このような山暮らしの楽しみを教えようか。それはね、緑の松の樹を吹き過ぎてゆく、すがすがしい風にあるのだよ」となるう。

五言八句の漢詩であるから、四〇字しか使われていないが、何という広々とした爽やかさだろう。「仙桂」とは月桂樹のことで、ここでは香木の類だという。まるでゲーテの「ミニヨンの歌」の一節、「青く晴れし空よりしづやかに風吹き ミルテの木はしづかにラウレルの木は高く」を思わせるような、どことなくロマンティックな雰囲気さえ感じられる詩である。

もう一編は五言絶句の「独坐山中」で、次のような詩である。

烟霧塵俗を辞り、山川処居を壮にす。

此の時よく賦することなくは、風月自らに余を軽らむ。

俗塵を去って山中に住まいを定める。こんな生活をしながら詩のひとつも出来なかったら、わたしはまわりの自然に笑われてしまうだろう、と隱遁生活の好ましさをうたう。

どちらの詩も、山中での暮らしがどんなにのどかで、すがすがしいか、そして、そこからどんなに心が自由にのびのびして楽しく、詩的感興が湧くものかということを述べたものである。隱遁にいたるまでの彼の心の葛藤がどのようなものであったのかは書かれていないが、この詩を読むと、隱遁することによって、彼がゆったりとした心のくつろぎを得られたことが感じられる。俗世間を離れることによって得られるみずみずしい精神の若返りさえここには漂っているようである。

作者民黒人がどのような経歴の人であるかも、生没年も詳しくいことは何もわからない。ましてや、この二編の漢詩がいつどのような状況のもとで作られたかもわからない。しかし、文学というものは不思議ではないか。そんなことは一切不明でも、これを読めば、おのずからなる気韻が、それこそ「松下清風」のように、読む者の心を吹き抜け、彼が感じた心ののびやかさがこちらに伝わってくる。この詩を読む人間の心の中に、隱遁の別天地が生まれ、息づく。世間の煩わしさをよそにして、自然とともに心豊かに暮らすという隱遁の理想の姿が、民黒人の詩から垣間見られるのである。

『本朝遯史』で、民黒人が巻頭に置かれているのも、編者である読耕斎が、彼の生き方に深く共鳴したからであろう。『本朝遯史』では、まず、「黒人は隱士なり。其の幽棲の詩に曰く」という書き出しで詩を全文引用し、続いて「独坐山中」も全文

引用し、これらが『懷風藻』に載せられているから、彼は天智天皇から孝謙天皇の時代の人であろう、と推測している。「賛」では、彼の経歴は不明であるが、これらの漢詩を読めば、出塵の志を知ることができるし、詩の格律が卓越しており語句が清新であると述べ、彼の漢詩が多く伝わっていないことを非常に残念がっている。『扶桑隱逸伝』は略伝で、黒人のことは経歴も時代も何もわからないと書き、その後彼の二編の詩を全文引用して終わっている。「賛」でも再び、彼がいったいどのような人物なのか全くわからない、と繰り返して、「黒人」という名前のごとく行跡を晦ましているのをよしとしている。

子 裕 内 島  
『本朝遯史』と『扶桑隱逸伝』の書き方を比べてみると、前者の方が、黒人への憧憬の念が強く、「ああ、黒人が幽棲いづれの所の山ぞや」とまで書き、もしその山の場所が特定できのなら、みずからそこへ赴きかねないほどの「賛」となっている。一方『扶桑隱逸伝』では、あくまで伝未詳の人物として遠い彼方の存在のように捉えており、読耕斎ほどの共感を感じられない。ただし、民黒人のことが両書で冒頭あるいは冒頭付近に置かれているのは、隱遁志向の古さとともに、隱遁の原型としての自由な境地を印象付けるものである。

## 2 大中臣淵魚

隱遁するまで、どのような人生を送ってきたのかということ

と、隱遁後の生活が対比的に描かれている人物もいる。大中臣淵魚は、『本朝遯史』では上巻五番目に登場する人物で、弘仁六年（八一五）に神祇大副に任じ、伊勢の祭主を兼任した人物であるという。この時代はちょうど、遣唐使として唐に渡った空海や最澄が帰国し、仏教を布教していた時代である。淵魚は約三〇年間神職にあって、職務に通曉していた。そして承和一〇年（八四三）、七〇歳の時、みずから辞職願いを提出して、その後は自分の邸に籠もってのどかに毎日を過ごした。嘉祥三年（八五〇）に七七歳で没したとあるので、退職後の生活は七年間ほどであり、彼が働いてきた三〇年間に比べると短いような気もするが、意外に現代のサラリーマンの人生と似ているかもしれない。賛には次のように書かれている。

賛に曰く、致仕の後、宅に在りて閑坐することを得ずして、夕日に子孫を愛する者世に多くこれ有り。淵魚今此の如し。亦可ならずや。此れ是れ真の致仕也。其の神宮の事を掌る、凡そ二十八年。惟ふに夫れ謹密の致す所。故に致仕に速て謹密亦改むる所なし。今試に淵魚の二字に就てこれを言へば、其の神事を掌るの際、神道の宗源に濡沫し、五十鈴御裳濯の清流に涵泳す。蓋し淵に躍るの魚か。家園幽閑に至りて、人事を接らず。蓋し或は潜伏の魚か。奈何一笑。

読耕齋は淵魚の生き方に対して、退官後も子孫のために俗事に奔走したり人事に関わったりする人が多い中であって、淵魚は一切そのようなことをしなかったと称賛している。そして、名前のごとく、職務にある時は、神官として十分に職務を果たして、まるで五十鈴川や御裳濯川の流れに躍る魚のようであり、一旦職務から退くや、世間と関わらなかつたのは、まるで潜伏する魚のようである、と述べている。なお、「夕日に子孫を愛する者世に多くこれ有り」の部分は、『白氏文集』や源信の『観心略要集』などに見られ、徒然草第七段にも、「そのほど(四〇歳)過ぎぬれば、かたちを恥づる心もなく、人に出で交らはん事を思ひ、夕べの陽に子孫を愛して、さかゆく末を見んまでの命をあらまし」とある。

『扶桑隱逸伝』では、大中臣淵魚は上巻の二一番目に登場する。『本朝遯史』では略伝が六行、賛が七行であったが、ここではかなり簡略に書かれており、伝記が五行、賛は一行だけである。淵魚は出家者ではないので、元政の関心もやや薄いようである。ただし、賛には次のように書いて、共感している。

賛に曰く、淵魚淵魚、載ち躍り、載ち潜くる。釣る者何ぞ求めん。

「淵魚」という名前のごとく、ある時は水面上に躍り上がり、

またある時は水の下に潜る魚のように、その時々で自分が納得できる人生を送った人物として称賛し、「釣る者、何ぞ求めん」と結んでいる。つまり、彼のような自在な人物は、釣り上げようとしてもできない魚のようなものだということである。ちなみに、中国では太公望の故事のように、釣と隱遁は関連があるが、日本の隱遁では釣のことはあまり出てこない。

### 3 開成皇子と行真

他人が羨むような境遇にありながら隱遁する人もいる。開成皇子は、光仁天皇の息子で桓武天皇の兄だった人である。奈良時代から平安時代にかけて、八世紀後半ころの人である。幼少期から英敏で、若くして出家したという。元政は人物評で、世間一般の人は微禄のために汲々とするが多く、ましてや身分が高かったり裕福に生まれついた人は、なおさら自分の境遇をわざわざ捨てることはしないのに、この皇子はすばらしい、と称賛している。また、藤原道長の息子で出家して行真と名乗った人物がいる。彼も子どものころから聡明で、抜きんでた英才だった。父道長もとわりわけ可愛がっていた。しかし、父が勧めた結婚を断り、突然出家して比叡山に入った時は、まだ一六歳の若さだった。増賀の弟子となって高僧となったという。

彼らがなぜ出家したか、その原因や心の悩み・迷いなどについて詳しく書かれていない。他人から見れば恵まれすぎるよ

うな境遇も、本人たちにとっては、かえってその境遇ゆえに自分が本当に求める生き方が阻害されてしまうと感じられたのではないか。現実の世界では何もかも希望がかなえられるような境遇、あるいはこれといった不満もないかわりに何となく人生のコースが決められてしまっていて、自力で切り開いてゆく可能性もない場合、すべてが不毛に思われ、生きがいを見出だせなくなるということは、いつの時代でもある。

開成皇子と行真は、二人とも仏道に入り、そのことを僧侶である編者元政は称賛した。しかし、このような生き方は、仏教を離れて考えると、果たして真の生き方として普遍性を持ち得ているかどうかは、難しい。なぜなら、開成皇子のことも行真のことも、儒学者林読耕斎が編纂した『本朝遯史』では取り上げられていないからである。ただし、『扶桑隱逸伝』に記載されている彼らの生き方から、現状に対してこれといった不平や不満がなくても、人間は心の奥底に何かしら言うに言われぬ欠落感を抱くことがあり、それを何物かによって埋め合わせようとして隠遁する人間もいることを、教えられる。

#### 四 隠遁像の読み換え

隠遁というと一人暮らしのイメージが強い。先ほどの行真のように親に勧められた結婚が嫌で若くして出家する場合もあれ

ば、結婚後妻子を捨ててたったひとりで山中で暮らす場合もある。いずれにしても妻や夫、父や母となって家族を構成して暮らしてゆくことへの拒否の姿勢が強い。家族間の人間関係という一見非常に強い絆を断ち切るほど、孤独に生きることへの希求が強烈であるのだろうし、また逆に最大の宝ともいえる家族をあえて捨てることによって、より高い宗教的な境地に達しようとするのである。

しかしここに、家族とともに生活しながら同時に隠遁者として認定されていた珍しい人物がいる。蘭笥翁という人である。蘭笥というのは、蘭草でつくった桶のような器のことで、彼はこの器作りを仕事としていた。歳は六〇歳、足が曲がり背中も丸い。それもあながち年齢からくるものではなく、病気で体が不自由になったためという。いったいどの出身でどのような人かもわからない。年老いた妻と三男二女がいる。暮らしは非常に貧しく今日一日の生計も立てられないほどののに、晏如としている。つまり、落ち着いて安らかに生きている。『扶桑隱逸伝』の人物評でも、なぜ彼がこのような暮らしに平然としていられるかわからない、と述べている。挿絵を見ると、確かに家族たちの表情はむしろ明るく、家族総出で仕事をしているさまは楽しげでさえある。江戸時代の名画、久隅守景の「夕顔棚納涼図屏風」ともどこか通じるような世界が描かれている。

『本朝遯史』にもこの翁のことは出てくる。そこでの人物評

では、妻と二女三男がいるのだから幸せである、とまで書かれている。儒教では家族を重視するからこのような評になるのだろう。読耕斎の父林羅山が書いた徒然草の注釈書には、兼好が徒然草の中で子孫は不要である、と述べているのを非常に強く批判している部分がある。これらの記述は、読耕斎も羅山も、彼らの著述を儒教の価値観によって書いていることをよく表わしている。

どのような本であれ、著者の個性が出ている本であれば、そこに著者の思想や価値観が反映している。したがって、読者としては、ある本を相対化することが大切な読書行為である。同じ時代に同じような隱遁列伝として『本朝遯史』と『扶桑隱逸伝』が編纂されていても、どちらか一方しか読まなかったら、儒教か仏教かどちらかの価値観によって隱遁というものを判断してしまうことになりかねない。両方を読み比べると、「隱遁とはどのような生き方か」ということが、より明確に分かってくる。

ところで、元政は彼の生き方を「晏如」と形容した。しかし、そもその出典である『菅家文章』では、まったく違う視点で蘭筭翁のことが書かれている。菅原道真の漢詩文集『菅家文章』には、彼がまだ一歳の少年のころに作った、「梅花は照れる星に似たり」という初々しくロマンティックな一節を持つ五言絶句をはじめとして、太宰府で失意のうちに没するまで、生涯

にわたる作品が収められている。「蘭筭翁に問ふ」という詩は第三巻に出てくるもので、作品の配列からみて、道真が四〇歳代のころ讃岐守時代に作られたものであろう。道真が二〇代から三〇代のころは官僚としてまた文章博士として、中央で大いに活躍していた時期であったから、突然遠く讃岐国への赴任を命じられた彼の苦悩はいかばかりであったことか。しかし、この讃岐時代に、人間と社会を見る目が格段に深まり、文学的には著しい進境がみられた。

「蘭筭翁に問ふ」も、もし道真がずっと都で高級官僚として過ごしていたならば、決して直接は出会わなかったであろう社会的弱者を描いた詩である。蘭筭翁の家族たちは「晏如」どころではなく、「茅の簷の内外にして声を合せて啼く」のが実情である。道真はこの詩を翁との問答体で書いており、主観的な感傷の言葉は出てこないが、翁の境遇への彼の深い同情の念は言外に溢れている。

蘭筭翁に対して、『菅家文章』と『扶桑隱逸伝』とどちらの人間的共感が深いかは、おのずとあきらかである。年老いて多くの家族をかかえ、苦しい生活を余儀なくさせられている翁の姿は、道真が描いたように辛い現実である。それを「晏如」と読み変えてしまった『扶桑隱逸伝』は、道真が地方行政官としてなんとか困窮者たちを救済したいという真情をまったく理解していないといわざるをえない。それでもあえてこの読み変え

にほんの一筋でも意義を見出だすとしたら、それは、このような状況においてさえ、「晏如」として暮らす人間がいるかもしれないという、さまざまな人間の心のありようの可能性を提示している点であろう。

## 五 賢者と文人たちの隠遁

ところで、後世にいたるまで大学者として著名な菅原道真が、漢文について教えを仰いだ隠遁賢者がいた。嵯峨隠君子という人物である。彼のことは『本朝遼史』にも『扶桑隱逸伝』にも書かれている。ある時、道真たちが漢文を作らなくてはならぬのにうまく出来なかったので、橘広相が馬を走らせて嵯峨まで行き、隠君子に教えてもらったという。橘広相も道真と並び称された当時の大学者である。この話は彼らがまだ若いころのことかもしれないが、それにしても俊才たちが漢文を教えてもらったのが、隠遁している賢者だったのはおもしろい。嵯峨隠君子のように無名のまま、静かに琴を弾じ詩句を吟じて自足し、しかも学才は当代随一であるというのは、まさに称賛に値する。そういえば徒然草にも、兼好がある時、撞き鐘の銘文にする漢詩の韻についてある人から尋ねられたことが第二三八段に書かれている。兼好もまたひとりの隠君子だったのだ。もっとも兼好の場合、自分が教えてあげて感謝されたことを、みずからちよっ

と自慢げに書き留めているので、嵯峨隠君子と比べると、ぐっとくだけた隠君子ではあるが。

賢者が同時代の人々に正当に評価され、活躍の場を得ることもあるが、菅原道真のように、華々しい活躍を嫉妬され、陰謀によって失脚・追放されるケースもある。不遇をかこち、世間と相容れずに生涯を送り、その不遇感や不満をバネに社会批判や人間批判を執筆し、後世に知己を待つ賢者の生き方もある。あるいは誰にも知られずにいることをむしろ幸福と思って、世間的な名声と無縁なまま一生を送る賢者もいる。ただ、「賢者」であるからには、自分だけの生き方を賢く過ごすのではなく、その知識や教養をなんらかの形で世の中に還元してこそ、真の賢者であろう。いくら知識や教養があっても、世間の人々を軽蔑しきって、世の中との回路を完全に閉じているとしたら、そのような生き方はかたくなすぎる。だから、嵯峨隠君子のように、自分の静かな生活は守りながらも、細い通路を世の中と保っている生き方は好ましいと考えられたのだろう。

隠遁伝には、高僧や貴族・武士たちだけでなく、歌人や連歌師のような文学者もよく出てくる。たとえば、清少納言の曾祖父にあたる清原深養父のことが『扶桑隱逸伝』に出てくる。深養父は歌人であったが、彼の日頃の生活信条が隠遁的であると考えられたからであろう。彼はある時、それまで時流に乗っていた人が急に失脚して悲嘆に暮れているのを見て、「わたしは



一喜一憂することなく生きてきましたから、どんなことがあっても心はいつも平静です」と語ったという。このような超然とした生き方は、隱遁の典型である。

また、室町時代の連歌師たちも隱遁者として捉えられることが多い。その中から代表的な二人、宗祇と肖柏を取り上げよう。宗祇は紀州の人で、若い時から和歌を好み、その後連歌師となった。当時の一流歌人たちに学び、一ヶ所に定住せずに九州から奥州まで諸国を漂泊した。西行のような歌人も旅と切り離しては考えられないが、室町時代の連歌師たちは、西行以上に旅の人生だった。それは彼らが西行に憧れて旅に出たという側面もあるが、もっと実際的な要請、つまり各地の武将たちが都の文化を移入すべく連歌師を招いて、古典や和歌の教えを受けたからである。

『扶桑隱逸伝』には、宗祇のエピソードとして、つねに香り高い薫香を焚きしめていたことを紹介している。彼はまわりに香気が漂っていることを好んだという。人物評では、文学者としての宗祇に付け加えることはないが、薫香は人を「幽」なる気持ちに導くものであるから、歌を作る時にこれ以上よいことはない、と解説している。「幽」とは、奥深くはるかなことである。現代では文学の香りというものが、それほど重んじられなくなっているように思われる。しかし雑駁な現代においてこそ、風雅な文学がもう一度見直されてもよいのではないか。俗

世間から超然として、身の回りに無頓着な生き方をする隱遁もあるが、自分なりの美意識を反映する風雅な、香気漂う隱遁もあるのだ。

牡丹花肖柏も宗祇に学んだ連歌師であるが、牡丹花という名前にも表われているように花が好きで、家の周囲にはいつの季節にも花が咲くように、樹木や草を植えていたという。外出する時は、角を金色に塗った牛に乗っていたので、人々はおかしがって笑ったが、本人は泰然自若としていっこうに気にかけるなかった。牛に乗るといえば、老子もいつも牛に乗っていたというから、肖柏の意識としては老子にならっていたのかもしれない。

肖柏には「三愛記」という短い随筆がある。三愛とは、彼が好んだ酒・香・花のことである。中国の場合、酒仙といってもよいような酒好きの隱者も多いが、日本では隱遁と酒はそれほど強く結びついていないので、肖柏は珍しい。酒といい、牛といい、彼のイメージには老荘的な隱遁の雰囲気があるといってもよいだろう。

肖柏は自分好みのものに囲まれて、心を楽しませる生き方をした人物であった。世間のことにかかずらっているとなかなか思い通りの暮らしができないから、隱遁する人がいるわけでもし毎日の暮らしが満足のゆくものであったら、それはそのまま日常が隱遁であるといってもよい。そういう意味では、紀俊

長・行文親子も自分らしい生き方をした人たちである。父の紀俊長は、紀長谷雄の子孫で代々紀州に住んでいた。紀長谷雄は平安時代の漢学者で菅原道真の弟子でもあった。俊長は神官で、読書と和歌を好んだ。後小松天皇が彼の歌を召して、宴席にも呼ばれたが、そのような厚遇も彼はそれほど栄誉なこととせず、応永一二年（一四〇五）に南紀に隠棲した。邸には梅の木が数百株、竹が数千本あり、彼はそこを散策しながら歌を吟じ、みずからを梅隠とか竹隠と称した。万巻の書物を積み上げて読むのを楽しみとしていた。息子の行文も父親の神職を継ぎ、やはり和歌を詠んだ。三首の和歌を献上して、天皇から剣一双を頂戴した。父と同様に梅と竹を愛して、詩書管絃を楽しみとしたという。

島内裕子  
俊長・行文親子のことは、『本朝遼史』に出ており、『扶桑隠逸伝』はほぼその記述をなぞっているのだが、『本朝遼史』には俊長がよく琴酒の徒を招いて宴会を催したことが書かれている。万巻の書を読み、文学や音楽や酒などを同好の士とともに楽しむ生き方を評して、彼は尋常の人ではなく立派な人物であると読耕斎も述べている。彼ら父子は、ともに天皇に召されたり、剣を賜ったりしているが、そのようなことよりも、好きな本を読んだり、同好の士とともに気取らない宴会を開いたりする方を好んだ。栄達や栄誉よりも静かで心豊かな生活に価値を置いたのである。

## おわりに

本稿では、隠遁をめぐる、『本朝遼史』と『扶桑隠逸伝』でどのように捉えられているかということを概観してみた。「隠遁」とは、狭く仏教の僧侶の生き方を指すだけでなく、出家しなくとも俗世間を離れて、自分自身の価値観に基づいて生きる生き方であるといえよう。その生き方は名利と関わらないことは重要であるが、物質的な多寡とは直接は結びつかない。つまり、中世の仏教説話集では、出家隠遁とは、すべてを捨てて一人で山野に分け入り、あるいは定住せず常に漂泊しながら、無一物に近い状態で生活することを指していた。けれども、『本朝遼史』も『扶桑隠逸伝』も、経済的に豊かな紀父子のような文人の生き方を隠遁伝として記載しており、物質的に豊かなことがそのまま世俗的であるとは、考えていない点に注目すべきであろう。また、蘭笥翁のように、困窮の中にあってもその状況を楽しむ境地に達していれば、それは隠遁の生き方なのだとしている。つまり、隠遁ということ、他人や世間の基準・価値観に捉われない自由な精神のありようとして規定しているのである。

隠遁伝がまとめられるようになったのは、江戸時代初期になってからであったが、この時期になって、ようやくそれ以前の長い時代を視野に入れて、隠遁の本質を遠望することが可能となっ

たのである。

注

- (1) 本稿を執筆するにあたり、『本朝遼史』は東京大学総合図書館蔵、寛文四年四月刊行の版本、『扶桑隱逸伝』は同じく東京大学総合図書館蔵、寛文四年一月刊行の版本を参照した。
- (2) 『本朝遼史』には兼好のことしか出てこないが、『扶桑隱逸伝』には、徒然草に登場する盛親・心戒・平惟継らのことも書かれている。特に、盛親と平惟継については徒然草の記事をほぼそのまま引用して伝記を書いている。宗政五十緒『扶桑隱逸伝』（臼田甚五郎編『日本文学の伝統と歴史』所収・桜楓社・昭和五〇年）
- (3) 徒然草の本文は『新訂徒然草』（西尾実・安良岡康作校注、岩波文庫・一九九一年）によるが、句読点・表記等改めた箇所もある。
- (4) 新釈漢文大系『蒙求・上下』（明治書院・昭和四八年）の通し番号一八七「柳下直道」と二三一「顔叔秉燭」に、柳下惠のことが書かれている。『蒙求』の引用は、上記による。
- (5) 『懷風藻』の引用は、日本古典文学大系『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』（岩波書店・昭和三九年）による。
- (6) 『菅家文章』の引用は、日本古典文学大系『菅家文章・菅家後集』（岩波書店・昭和四一年）による。
- (7)

（平成八年十一月六日受理）

The Recluses in *Honcho-Tonshi*  
and *Fusō-In'itsuden*

Yuko SHIMAUCHI

ABSTRACT

This paper examines the portrayal of recluses in the works *Honchō-Tonshi* and *Fusō-In'itsuden*. These two biographical writings were published in Kanbun - Period (1661-1673).

Medieval narrative literature gives a very good picture of the life of the recluses of that period, who were characteristically priests. The authors of these works from the Edo Period, on the other word, aim to portray a wider variety of recluses, and not just priests.